

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月3日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008-2012

課題番号：20320052

研究課題名（和文）グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成

研究課題名（英文）Cultural Identity and the Formation of a New Canon of World Literature in the Age of Globalization

研究代表者

沼野 充義（NUMANO MITSUYOSHI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：40180690

研究成果の概要（和文）：本研究では、ロシア東欧・広域英語圏・広域スペイン語文学の専門家の共同作業により、国・言語の枠を超えた広い視野から現代世界の文学の複雑なプロセスを総合的に調査し、新しい文学研究のあり方を探った。その結果、グローバル化時代にあっても世界の文学は一方的に均質化することではなく、全体として豊かに多様化していることを明らかにするとともに、欧米中心に組み立てられてきた従来の世界文学像を拡張し、日本も視野に入れた新たな世界文学カノンの可能性を探究することができた。

研究成果の概要（英文）： This research project is based on the collaboration of specialists of English-language literature, Spanish-language literature, and Russian and East European literature. We investigated the complicated process of contemporary world literature comprehensively, taking a broad view that would make it possible for us to go across the borders of nations and languages, and explored new approaches to literary studies. As a result, we succeeded in showing clearly that even in the age of globalization, world literature is not being homogenized one-sidedly; it is rather becoming richly diversified as a whole. We also expanded the conventional framework of world literature centrally based on the Western literary canon, and studied possibilities of a new canon of world literature that would integrate Japanese literature into itself.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2011年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2012年度	2,700,000	810,000	3,510,000
総 計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：世界文学、翻訳、広域英語圏文学、ラテンアメリカ文学、ロシア東欧文学、現代日本文学、越境文学、文学のカノン

1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀後半以降の世界の文学を概観すると、従来の一国一言語の枠内では捉えきれな

い越境的現象が顕著になってきている。こうした事情を反映して、越境や亡命といったテーマを掲げる文学研究が増えてきている。本

研究計画の代表・分担研究者も、既にこうした方向での文学研究を切り拓く道を探ってきた。ラテンアメリカの分野では野谷文昭『越境するラテンアメリカ』(1989)、ロシア東欧では沼野充義『徹夜の魂—亡命文学論』(2002)、国や言語の枠を越えて世界現代文学を見る試みとしては柴田元幸・沼野共著『200X年 文学の旅』(2005)がその主な成果である。

(2) グローバル化という言葉が今日多用され、あたかも世界の文学が均質化しつつあるかのように言われがちだが、実際には国・言語・エスニシティ別の固有性は、時にはむしろ強まり、新たに展開している。一口にグローバル化と言っても、国や言語の境界を越えていこうとする傾向と、境界の中にとどまって伝統的な価値を守ろうとする傾向とが、相互にせめぎあっている。本研究の開始にあたっては、このようなグローバル化現象を前提として踏まえながらも、それを全面的に肯定するわけではなく、むしろ批判的に分析していくべきであるという問題意識があった。

(3) 日本学術振興会の人文社会科学振興プロジェクト第5領域において沼野が企画委員・プロジェクトリーダーとなって2004年度に開始されたプロジェクト「伝統と越境—越えゆく流れととどまる力のインタラクション」は、前述のような現状認識から出発したものであり、その問題意識はそのまま本研究の学問的背景になっている。さらに、東京大学大学院で1998年度からまず沼野が、次に柴田がほぼ一貫して携わってきた「多分野交流演習プロジェクト」も、こうした方向で世界の文学を再検討し、新しい文学研究のあり方を探るものだった。その成果としては、まず沼野編『多分野交流演習論文集—とどまる力と越え行く流れ』(東京大学大学院人文社会系研究科、2000)がまとめられ、次に柴田編『文字の都市』(2007)が出版された。これらの刊行物は、現代における世界文学へのアプローチとして本研究プロジェクトの前提となるものであった。

(4) 本研究プロジェクトの母体となる現代文芸論研究室(代表者と分担者の全員が所属)は、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部において、まさに前述のような問題意識に基づいて2007年4月に新設されたものであり、一国一文学の枠を超え、現代日本文学も視野に入れながら、世界の文学を幅広く視野に入れて研究・教育することを趣旨としている。本研究室は、ロシア東欧文学、ラテンアメリカ文学、広域英語圏文学、現代日本文学といった、世界の様々な地域の文学の専門家が交流する場となっており、本研究課題も

研究室全体で取り組むべきものと位置づけられる。

2. 研究の目的

(1) 以上のような学問的背景と問題意識を踏まえ、本研究は現在の世界の文学の複雑なプロセスを全体としてとらえるために、以下のような問題の解明を目的とする。

ヨーロッパ周辺の越境的な文学のありかた—ロシア東欧の亡命文学

20世紀後半以降、旧ソ連・東欧から「西側」への亡命の動きは顕著なものであり、その中には20世紀後半の世界文学を代表する重要な作家が多数含まれていた(ナボコフ、プロツキー[以上ロシア出身]、ゴンブロヴィチ[ポーランド]、クンデラ[チェコ]、キシシュ[ユーゴ]等)。これらの作家の越境・亡命体験や、異文化との接触が、その創作にどう影響し、また亡命作家の存在が西側の文学にどんなインパクトを与えたかについての、総合的な研究は日本ではまだ乏しい。本研究では、上記のうち何名かの特定の作家に重点をおき、現代世界の文脈内で彼らの越境が持った意味を解明する。また、研究協力者の参加も得て、現代ドイツやフランスなどにおける移民文学や、イディッシュ語やクレオール語など「混成語」によって書かれた文学も視野に入れる。

(2) ヨーロッパ周辺の越境的な文学のありかた—広域スペイン語圏文学の場合

1960年代の新小説の<ブーム>自体、国境を越えスペイン語圏全体に広がる現象であり、その媒体となったのはスペインの出版社の文学賞やパリで発行されるスペイン語雑誌だった。それらは亡命作家やディアスポラ作家に発表の場を提供し、スペイン語圏全域に作家の存在を知らしめるとともに、世界市場にアピールすることで多国語による翻訳の機会も提供した。さらに北米のヒスパニックないしラティーノ文学、特にメキシコ系アメリカ人によるチカーノ文学は、スペイン語と英語のバイリンガルの傾向の強い越境的文学として顕著なものであり、2言語にまたがる創作をささえる文化的アイデンティティや言語的特質も注目に値する。

本研究では、こういったラテンアメリカ文学や北米のスペイン語文学に本質的に備わっている越境性に焦点をあて、個別の作家・作品研究を前提としながらも、総合的な視点からその文学的意義と現代世界の文学に与えつつある影響を解明する。

(3) 英語圏文学の多様化とグローバル化

インド系のラシュディ、日系のイングロなど、現在イギリス文学の重要作家の多くが英語を母語としない書き手であり、またアメリ

カにおいても、メキシコ系、カリブ系、アジア系、東欧系など、様々な出自を持つ移民作家が活動している。こうした流れのなかで、標準的な英語という概念はもはやかつてほどの有効性を持たず、それぞれの書き手が、己の母語との関係性においてそれぞれ独自の英語を組み立てている感がある。そのなかで、英語圏文化と非英語圏文化の政治的・経済的不均衡が鮮明に浮かび上がるという面もあり、「多様化」は「グローバル化」の問題点も浮き彫りにする。本研究ではこの問題に包括的に取り組み、グローバル化時代における英語圏文学の多様化に新たな光を当てる。

(4) 翻訳が現代世界文学において果たしている役割

グローバル化時代における世界の文学は、総体としては当然のことながら、翻訳を通じて存在している。さまざまな言語で書かれた作品をすべて原語で理解できる読み手は現実には存在せず、国と言語を超えて文学作品が理解され享受されるためには、翻訳の存在が不可欠である。本研究は、その過程で生じてくる、翻訳によって失われるものは何か、正しい翻訳というものはありうるのか、といった問題を解明することを目指し、翻訳とオリジナルの関係、オリジナルに備わっている文化的アイデンティティと翻訳を通じてのその変容といった側面に焦点をあて、翻訳を通じて文学作品を読むという営みはそもそもどういうことか、問題提起を行いたい。

また村上春樹の国際的な人気に端的に現れているように、現代日本文学も現在、英語をはじめ様々な言語への翻訳を通じて、世界的に受容されるにいたっている。こういった日本文学の「国際化」の意義と問題についても、上述のような翻訳に関する問題意識を前提として研究を行う。

(5) 「世界文学」論の展開と新たなカノンの形成

上記のように、本研究では主としてヨーロッパ周縁の越境的な現代文学のあり方に着目しつつ、それを総合して、現代世界の文学を広い視野で捉えることを最終的には目指す。その際、「世界文学」とは翻訳を通じて流通し、それぞれの受入国で新たな価値と文化的アイデンティティを付与されるものだとする David Damrosch の論や、世界の文学を地理的・統計的に把握していこうとする Franco Moretti の「遠読」(distant reading)といった視点を参照しつつ、西欧だけでなく、広域英語圏・広域スペイン語圏・ロシア東欧・日本も含む形での新たな世界文学像をつくることを目指す。

世界文学のカノン(canon)が書き換えられ

るべき時期にさしかかっているといわれて久しいが、本研究では西欧の古典中心の伝統的なカノンを尊重しつつ、それを拡張し、ヨーロッパ周辺や日本も含んだ形でのカノンを考えていく。

3. 研究の方法

(1) 研究を進めるにあたっては、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室に所属する研究代表者・分担者の計4名が中心となり、以下に挙げる各専門分野での研究を深めつつ、それぞれの分野に関連した研究協力者と緊密な連携を常に保って研究を行う。

(2) 研究集会などには、院生やポスドクなどの若手研究者に積極的に参加を呼びかけ、発表・共同調査・討論などの場を与え、新しい文学研究を切り拓く広い視野を持った研究者を養成する。また、本研究の代表者・分担者がこれまでの研究活動を通じて培ってきた研究者・文学者の幅広い国際的ネットワークを活用し、海外の研究者・作家・翻訳家などにも協力・参加してもらう。具体的には、Eメールを通じて意見交換を行うほか、日本に短期招聘してシンポジウムを開催する。

(3) 研究代表者・分担者は、それぞれの専門分野での文献研究のほか、海外での調査(作家との聞き取り調査を含む)、個別の小規模の研究集会・講演会などを積み重ねる。またそれぞれの分野での国内の若手研究者を協力者として招き、研究集会や討論など、様々な場で協力してもらう。

(4) 年に一回程度、海外からの招聘ゲストを交えてのシンポジウムなどを開催する。シンポジウムは原則として公開し、他大学の研究者や一般市民との意見交換・交流も目指す。

4. 研究成果

(1) 本研究は現代世界の文学の複雑なプロセスをできるだけ広い視野から調査し、新しい文学研究のあり方を探るものである。代表者が主な専門領域とするロシア東欧の他、分担者と緊密な連携をとりながら、広域英語圏、広域スペイン語圏、亡命・越境文学など様々な分野の研究を並行して進めた。その際、各年度毎に重点課題を定め、それを中心に共同研究を進めた。初年度(平成20年度)に重点課題としたのは、第1に欧米の周縁や日本も視野に入れて世界文学の現状を総合的に把握しながら、欧米中心主義的な世界文学像の再検討を試みることで、第2に現代世界文学における翻訳の役割の重要性を解明することである。

第1の課題については、①南北アメリカ

ベトナム系作家リン・ディン、ポーランド系作家ダイベック、世界文学とラテンアメリカ、ガルシア＝マルケス、現代キューバの作家と文化的環境、②中・東欧―セルビア作家ヴァイチと中欧ポストモダニズム、ハンガリー作家エステルハージと中欧の詩学、ポーランドの周縁文化、③日本と世界―中国人日本語作家楊逸、日独バイリンガル作家多和田葉子、現代日本文学とロシア、日本文学の境界と新たな「世界文学」の概念、といった様々な作家・主題について個別の研究を深めるとともに研究集会・シンポジウムなどを開催し、現代世界文学の多様性と越境性を確認し、文学的カノン（規範）が再編成されつつある現状を概観した。

第2の課題については、若手研究者の積極的な参加を得て国際ワークショップ「翻訳と世界文学」と越境・移民文学をめぐるシンポジウム「未来への郷愁」を主催したほか、日本ロシア文学会全国大会でワークショップ「ロシア文学にとって翻訳とは何か？」を組織した。その結果、現代の世界文学において翻訳が決定的・副次的・周縁的な現象ではなく、作家自身の創作のプロセスの本質に関わるものであることを確認し、また翻訳による原作の変容と受容を通じて現代の世界文学が形づくられていく過程を検討した。

(2) 平成 21 年度に重点課題としたのは、「グローバル化時代の越境的体験と文化的アイデンティティ」であり、代表者が主な専門領域とするロシア東欧の他、分担者と緊密な連携をとりながら、広域英語圏、広域スペイン語圏における越境的な作家とその創作を、個別の様々な例に即して調査・分析した。

具体的には、現代アメリカの作家レベッカ・ブラウン、ブラジルの映画研究者ジョアン・ルイス・ヴィエイラ、ロシアの作家ボリス・アクーニン、ベオグラード在住の詩人・文学研究者山崎佳代子、ベルリン在住のソ連出身作家ヴラジミール・カミーナー、オーストリア在住のユダヤ系（ロシア出身）作家ヴラジミール・ヴェルトリプなどをゲストとして招き、講演会を開催するとともにそれぞれの作品の検討を行なった。

また 7 月には加藤有子を中心となって「シュルツ祭」というシンポジウムを企画し、ポーランドのユダヤ系作家ブルーノ・シュルツの創作と生涯を検討した。10 月にはボルヘス会に協力して、ボルヘスと南北アメリカという主題を検討した（野谷・柴田）。11 月には沼野が中心となって、セルビア出身のユダヤ系作家ダニロ・キシユをめぐるシンポジウムを、奥彩子・山崎佳代子といった専門家の参加を得て開催した。また 2010 年 3 月には、日本ナボコフ協会と連携してナボコフ研究者（マリコワ、バビコフ、レヴィング、シュ

ライヤー父子、ネボムニヤシチー）をアメリカおよびロシアから招き、連続講演会を通じて、亡命作家の詩学と生涯を検討した。

これらの研究活動を通じて、越境的体験を持つ様々な作家の個別例について、豊かな事例が収集され、多分野的な視点から今後総合分析していくための資料が十分集められたと自己評価している。

(3) 平成 22 年度の主要課題は「グローバル化時代の世界文学の多様性と多言語性」であり、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア東欧圏の三つの分野を主要な領域としつつ、現代日本も常に視野に入れて研究活動を行なった。

まず、広域英語圏については、非英語圏出身作家の英語文体の研究に重点をおき、ジョゼフ・コンラッドやヴラジミール・ナボコフ、カズオ・イシグロなどの例を取り上げ、彼らの文体の比較検討を中心に、テーマ、世界観などを考察した。研究代表者沼野によるナボコフ『賜物』、分担者柴田によるコンラッド『ロード・ジム』の新訳と詳細な解説（どちらも河出書房新社刊、世界文学全集所載）もこの分野での成果である。

広域スペイン語圏では、ヒスパニックあるいはラティーノ文学と呼ばれる北米の文学を視野に入れながら、キューバ、コロンビアなどのカリブ海圏の文学に重点を置き、この地域の言語と文学の多様性を研究した。

ロシア東欧圏では、この地域における多民族性・多言語性に重点を置き、民族・言語・文化的アイデンティティの関係を研究した。対象となる主な作家は、アブハジア系作家イスカデル、チュヴァシ系詩人アイギ、ポーランドのユダヤ系作家シュルツなど。また代表者沼野はストックホルム、韓国、モスクワなどの学会で、ロシア東欧文学とアジア・翻訳などのテーマで発表し、この分野における国際的交流を推進した。分担者加藤はドロホビチの国際学会でシュルツについて報告を行なった。

上記の様々な分野における研究を統合・発展させる契機として、ゲスト講師を招いての研究集会・セミナーなども積極的に開催した。そのうち特に重要な三つの国際シンポジウム等については、それぞれ報告集をまとめて 2011 年 3 月に刊行した（「本郷の春―ナボコフ亡命ロシア作家たちをめぐる連続講義の記録」[日本語]、「ロシア文学と東アジア」[英語]、「社会制度としてのロシア文学」[ロシア語]）。

(4) 平成 23 年度は「現代世界文学と翻訳」を主要課題とし、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア東欧圏の三つの分野を主要な領域としつつ、世界における日本文学の受容の広

がりも視野に入れて翻訳に焦点を合わせた研究活動を行なった。

具体的には研究代表者・分担者のそれぞれの地域に即して研究を進め、成果を持ち寄って世界的な視野を得るようにつとめた。また、日本文学が各国語にどのように訳され、受容されているか、あるいは外国文学が日本語にどのように訳され、受容されているかを視野にいれ、その際生ずる言語・文化的問題点も検討した。野谷のラテンアメリカ文学と日本の関係についての研究成果、および沼野のロシア文学の日本への影響などが、この方向での主たる成果である。

今年度は研究の進展と海外の研究者との交流の深まりにともない、欧米だけでなく、東アジアとの関係も重視しながら、研究活動を行い、予期していたよりも大きな成果を挙げた。柴田による翻訳を主題とした PESETO 会議の組織と報告、沼野による第 3 回東アジア・ロシアユーラシア研究学会におけるパネル「近代日本文学とロシア」の組織などがその主な成果である。

また加藤はヨーロッパ辺境地域における多言語的文化のあり方の研究を進め、翻訳によらないマイナー言語のネットワークの可能性という新たな方向の探究も視野に入れて成果をあげた。加藤の博士論文をもとにした著書『目から手へブルーノ・シュルツ』も、東欧文学の世界文学との関係に大きな示唆を与える業績となっている。

さらに平成 23 年 11 月 12 日にアメリカの比較文学者デイヴィッド・ダムロッシュ氏（ハーヴァード大学教授）を招待して世界文学について大規模な国際シンポジウムを組織した他、書物の新しい形態を探るポーランドのバザルニク、ファイフェル氏を招いて講演会などを開催し、これまでの研究を総合して考える道筋をつけることができた。

(5) 最終年度にあたる平成 24 年度は「新しい世界文学像とカノンの形成」を主要な研究テーマとして掲げ、これまでの研究調査成果を統合するとともに、従来の西欧先進国中心のカノンを刷新し、新しい世界文学像を描き出すことを試みた。その際、ゲーテがかつて語ったような普遍的価値をもつ「世界文学」の概念から、現代の多様な世界文学を捉えようとしているハーヴァード大学のダムロッシュ氏までの議論を踏まえ、各民族がその独自性を保持しながら多様にして普遍性をもった新しい世界文学がどのように可能になりつつあるか、見通しを示すことを試みた。

研究代表者・分担者がこれまで積み重ねてきた研究成果は、今年度は特に世界各地の国際学会で発表する機会が多く、国際的な研究交流や成果のアピールなどでも成果が大きかった。沼野は、2012 年 6 月にベルリン自

由大学で開催された国際ワークショップ「世界文学へのアプローチ」において「現代日本文学における移動する境界」、2012 年 9 月にモスクワで開催された「国際翻訳者会議」において「現代日本におけるロシア文学—受容と影響」という報告を行い、現代日本文学の世界文学における位置づけを試みた。また加藤はイギリス、ウクライナ、アメリカ、フランスなどにおいてシュルツ研究に関する報告を行い、国際的な東欧文学研究の場に加わって本研究の視野を広げることに貢献した。現代世界文学の最も注目すべき作品の一つであるボラーニョ『2666』の野谷による翻訳（共訳）、現代日本文学を英訳で紹介する雑誌 *Monkey Business* の柴田による編集刊行なども、本研究に緊密に関係した業績である。

最後に研究の総まとめとして 2013 年 3 月 2・3 日に東京大学で 100 名以上の内外の研究者を集め、国際会議「グローバル化時代の世界文学と日本文学—新たなカノンを求めて」を開催した（日本学術振興会国際研究集会助成）。そこでは現代世界文学の多様な側面を討議し、特に日本文学をも視野に入れた世界文学へのアプローチ方法を探究するとともに、新たな世界文学カノンの可能性を模索した。この会議で集中的に討議された現代日本文学、世界文学の概念、翻訳論、ラテンアメリカ文学、越境と混成、現代ロシア中欧文学などをめぐる主題が、5 年間の研究活動のほぼ全体をカバーすることになった。

この国際会議の報告集は 2013 年度中に欧文で刊行する予定で、現在編集作業中である。またその中から日本の読者に特に興味深い論文を選んで日本語訳し、日本語でも単行本として刊行する予定である。

また、2012 年に東京大学出版会より刊行された塩川伸明・小松久男・沼野充義他共編『ユーラシア世界』（全 5 巻）は本研究課題と内容的に緊密な関係にあり、これも重要な研究成果の一端として位置づけられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 31 件）

- ① 沼野充義、さまよえる境界、捏造された幻影—中（東）欧文学の〈地詩学〉を求めて、思想、査読無、1056 号、2012、pp. 292-297.
- ② 加藤有子、物語／歴史と祖型、西スラヴ学論集、査読有、14 号、2011、pp. 89-124.
- ③ 加藤有子、イメージ・テキスト・書物、スラヴ研究、査読有、57 号、2010、pp. 1-25.
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic-studies/57/01Kato.pdf>
- ④ 柴田元幸、20 世紀アメリカ小説と映画、

れにくさ、査読無、2号、2010、pp.181-191.<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/51944/1/reny002012.pdf>

- ⑤ 野谷文昭、現代キューバの作家たちと文化的環境、次世代人文開発センター紀要、査読無、22号、2009、pp.13-19.
- ⑥ Mitsuyoshi Numano, *Toward a New Age of World Literature*, れにくさ、査読無、1号、2009、pp.188-201.
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/51931/1/reny001012.pdf>

〔学会発表〕(計41件)

- ① Ariko Kato, *The Representation of Hands in Schulz and Rilke, Schulz lu et interpr  t   en Europe Centrale*, 2013年3月21日、INALCO (フランス)。
- ② Mitsuyoshi Numano, *Shifting Borders in Contemporary Japanese Literature: Toward a Third Vision, Concept Laboratory "Approaches to World Literature"*, 2012年6月26日、ベルリン自由大学。
- ③ 柴田元幸、「仰ぎ見る」翻訳・「対等」な翻訳—外国小説の日本語訳、日本小説の外国語訳、第三回 PESETO 人文学会議、2012年3月24日、東京大学。
- ④ Mitsuyoshi Numano, *Modern Japanese Literature and Russia: Reception, Influence, and Interaction: Contemporary Japanese Literature under the Shadow of the Great Russian Literature, The Third East Asian Conference of Slavic-Eurasian Studies* (中国ロシア東中欧学会主催、JCREES協力)、2011年8月28日、北京(中国)。
- ⑤ 沼野充義、Новая волна переводов русской литературы в Японии, 国際翻訳者会議、2010年9月3日、モスクワ・ロシア国立外国語文献図書館。
- ⑥ Ariko Kato, *Ksi  ga jako topos pisania i rysowania, International Conference „Schulwowskie inspiracje w literaturze,”* 2010年5月27日、ドロホビチ教育大学(ウクライナ)。
- ⑦ 柴田元幸、北米文学が読むボルヘス／ボルヘスが読む北米文学、ボルヘス会創立10周年記念シンポジウム、2009年10月24日、セルバンテス文化センター東京。
- ⑧ 野谷文昭、『百年の孤独』の成立過程、ガルシア＝マルケス会議、2008年10月3日、セルバンテス文化センター東京。

〔図書〕(計23件)

- ① 沼野充義、作品社、世界文学から/世界文学へ—文芸時評の塊 1993-2011、2012、

506+xvi ページ。

- ② 沼野充義 (編著)、光文社、世界は文学でできている、2012、374 ページ。
- ③ 沼野充義 (共編)、沼野充義、加藤有子 (共著)、東京大学出版会、『ユーラシア世界2 ディアスポラ論』、2012、259 ページ。
- ④ 加藤有子、水声社、ブルーノ・シュルツ—目から手へ、2012、368 ページ。
- ⑤ Tadashi Wakashima and Mitsuyoshi Numano (共編)、日本ナボコフ協会、*Revising Nabokov Revising*, 2011、211pp.
- ⑥ Motoyuki Shibata (共著)、Palgrave Macmillan, *Kazuo Ishiguro: New Critical Visions of the Novels*, 2011、pp. 46-53.
- ⑦ 野谷文昭 (編)、岩波書店、日本の作家が語るボルヘスとわたし、2011、222pp.
- ⑧ Ariko Kato (共著)、Wydawnictwo KUL, *Biale plamy w schulzologii*, 2010、pp.151-181.
- ⑨ 沼野充義 (編著)、東信堂、芸術は何を超えていくのか? (未来を拓く人文・社会科学15)、2009、200 ページ。

〔その他〕

関連ホームページ：

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/genbun/>

現代文芸論研究室のHP。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~sekaibun/Home.html>

国際会議「グローバル化時代の世界文学と日本文学—新たなカノンを求めて」のHP。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沼野 充義 (NUMANO MITSUYOSHI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：40180690

(2) 研究分担者

野谷 文昭 (NOYA FUMIAKI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：60198637
柴田 文昭 (SHIBATA MOTUYUKI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90170901
加藤 有子 (KATO ARIKO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教(平22-24)
研究者番号：90583170
毛利 公美 (MOURI KUMI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教(平20-21)
研究者番号：30419212

(3) 連携研究者

無し